HOKUSEI@COM

2010・JANUARY
vol.9

HOKUSEI GAKUEN UNIVERSITY
COMMUNICATION MAGAZINE WINTER EDITION

北星学園大学
北星学園大学短期大学部

02-03
[特集]
札幌市長
上田文雄さん
インタビュー

02-03
ともに考える。
行動する。
札幌の未来が、
もっと楽しくなる。
札幌市長
上田 文雄さん

04-05
[学生たちの素顔]
東アジア学生交流プログラム
EASCOM
アジアに広がる、
北星の輪。

06
[OB&OG インタビュー
卒業生は、いま。]
北海道高等盲学校教諭
吉田 重子さん
自ら発信する。
そこから
未来が始まる。

07
[先生たちのその素顔]
文学部　菊地 寛先生
人間ドラマを
追いかけて、
時代の風を切って、
前へ。

08
[大谷地交流録]
本屋のオヤジと
本好き学生、
大いに語る。
[HOKUSEI INFORMATION
北星学園大学からのお知らせ]
クロッカス球根植栽
中庭にクロッカスの
球根1,000個を植栽。

インタビューに臨む学生
（市長室前にて）

［特集］ INTERVIEW

札幌市長　上田文雄さんインタビュー

ともに考える。行動する。札幌の未来が、もっと楽しくなる。

札幌市民でこのお顔を知らない方はいないはず。2003年の市長選初当選から再選を経て今年で7年目を迎えた上田文雄・札幌市長です。緊張しきりの学生インタビュアーを気さくな笑顔で迎えてくださいました。

札幌の木・ライラックと北星学園の深い縁。

上田市長は著書『札幌ちょっといい話』で、ライラックが本学園創立者サラ・C・スミスによってもたらされた由来を紹介。「その樹齢は札幌の女子教育の歳月でもある」と本学園の歴史にも言及されています。

弁護士から市長へ。人のために、社会のために。

山下：私たちは経済法学科で経済と法律を学んでいます。市長も現職の前は弁護士をされていましたが、弁護士を志したきっかけは何だったのでしょうか。

上田：私が東京の大学に進学したとき、日本は70年安保闘争のまっただ中でした。そんな時代の中で自分なりに社会と向き合い、考え、行動する中で見えてきたのが「人の役に立ちたい」「社会に影響力のある仕事がしたい」という思いだったのです。弁護士として手がける事件そのものは小さくても、そこから社会に問題提起を行い、さまざまな形で社会を動かすきっかけになるかもしれない――そんな気持ちから、労働問題や消費者問題、少年事件、公害訴訟など、とくに社会的事件の解決に力を入れてきました。その後NPOや地域活動の支援にも携わるようになり、市政に強い関心を持つようになったのです。

山崎：弁護士から市長へ、異なる世界への転身にギャップはありませんでしたか？

上田：弁護士の仕事は、ひとりの人権を救済することでひとつの結末を迎えることの繰り返し。市長が向き合うのは札幌市民190万人であり、市民の生活がある限り市長の仕事に結末はありません。190万人ひとりひとりと対峙することは難しいけれど、市民の協力のもとで小さな進歩を積み重ねて、すべての人がよりよく生きられる街にしていきたいと思っています。その根底にあるのは、学生時代に抱いた「人の役に立ちたい」「社会に影響力のある仕事がしたい」という志であり、その意味で弁護士としての25年のキャリアはさまざまな形で活きていると思いますね。

北海道の魅力と成熟した市民意識を併せ持つ街、札幌。

山下：札幌は全国的に好感度の高い街として知られていますが、市長ご自身が考える札幌の魅力は何ですか？

上田：やはり「北海道の中にある都市」という点じゃないかな。豊かな自然があり、見どころもたくさんあり、食べものもおいしくて……などなど恵まれたバックグラウンドを持つ北海道において、政令指定都市として充実した都市機能を備えている街は全国でも稀な存在だと思います。きみたちは札幌についてどう思う？

山下：札幌駅界隈は便利なのでよく利用しますし、大通公園は中心部でありながら緑豊かでとても落ち着きます。都会ならではの楽しみと自然がひとつになった、魅力的な街だと感じます。

山崎：私は生まれ育った札幌が大好きです。市長は著書『札幌ちょっといい話』の中で、札幌の木・ライラックは北星学園の創立者スミス先生がアメリカから持ってきた花だったことに触れてくださってますね。自分が毎日通っている大学と札幌という街のつながりを強く感じ、とても誇りに思います。

上田：私も毎年ライラックまつりで『ライラックの歌』を口ずさむたび、札幌に住んでよかったなあ、と思います。札幌は昔も今も全国から憧れられている街ですが、市民自身も98％が「好き」と答えている、自他ともに認める魅力的な街なんですね。ここ市長室は市役所の10階にありますが、窓から街を見渡すたびに札幌への愛着を感じるとともに、190万人の市民に対する責任を再認識して、身が引き締まる思いがします。

↑2007年ライラックまつりで苗木をプレゼントする上田市長(右は本学在学中にミスさっぽろだった坂本佳子さん)

↑学生からプレゼントされた北星学園大学オリジナルワインを手に笑顔の上田市長

PROFILE

上田　文雄（うえだ　ふみお）

1948年　十勝管内幕別町生まれ
1972年　中央大学法学部法律学科卒業
1978年　道央法律事務所に所属して弁護士業務開始
1994年　札幌弁護士会副会長
1995年　NPO推進北海道会議代表
1999年　特定非営利活動法人
　　　　「北海道NPOサポートセンター」理事長
2002年　「札響くらぶ」会長
2003年　札幌市長選再選挙で当選(1期目)
2007年　札幌市長選で再選(2期目)

経済学部経済法学科 3年
山下 大輝（やました ひろき）
札幌について意外と知らなかったことがたくさんあり、勉強になりました。目標の札幌市職員をめざして頑張ります。

経済学部経済法学科 3年
山崎 真実（やまざき まみ）
『若者の発想で新たな仕事を創出してみては』とアドバイスをいただき、商品開発などに興味がある私にとって励みになりました。

山下:市長として近年最も手応えを感じた事業は何ですか?

上田:昨年7月からスタートした新ごみルールですね。札幌ほどの大規模都市での家庭ごみ有料化がこれほどスムーズに実現できたのは、市の呼びかけに誠実に応えてくださった市民の力があってこそ。おかげで、当初10年後を見据えていたごみ減量の目標数値を、わずか半年で達成することができました。こうした状況を見るにつけ、成熟した自律意識を持つ市民に支えられている点も、札幌の大きな魅力だと実感します。

春の新風物詩「雪割り祭り」?!
創造都市さっぽろのアイデアと行動力。

山崎:市長は就任以来、音楽やアートなど芸術関連事業にも力を入れていらっしゃいますね。

上田:私自身も音楽が好きなのですが、すばらしい芸術にふれると全身の細胞が一斉に活性化されるような喜びを覚えませんか?こうした感動を市民が共有できるまちづくりをしたいという思いが、つねに私の中にあります。現在もパシフィック・ミュージック・フェスティバル(PMF)やサッポロシティジャズ、さっぽろアートステージなどのイベントのほか、2006年からは「創造都市さっぽろ」プロジェクトもスタート。さまざまな分野で感動のタネまきが始まっています。

山下:ライラックまつりやYOSAKOIソーラン、ビアガーデン、オータムフェスト、ミュンヘン・クリスマス市、雪まつりなど、札幌には四季のイベントがいろいろありますが、他に新たなアイデアがあればお聞かせください。

上田:待ちわびた春を謳歌する「雪割り祭り」なんてどうでしょう?冬の除雪費用や雪堆積場の確保は悩みの種ですが、市民が協力して学校のグラウンドや公園に雪を集めて、3月にみんなで一斉に雪割りをして春を祝う——札幌の新たな風物詩として全国ニュースになるかもしれないよ(笑)。

山崎:それは上田市長ならではのユニークな発想ですね。

上田:市民が互いに協力し合いながら雪と付き合ってきた札幌には、人々の温かな心が宿っています。市民の助けあいの心・温かな思いやりを育む雪は、まさに天からの贈りもの。雪を憂えて長い冬を過ごすのではなく、雪を楽しむ工夫をすることで、街の活性化とともに市民意識の育成にもつながると思うのです。よりよいまちづくりにはアイデアと行動力が不可欠。そこで大きな力となるのが、きみたちのような若い市民の存在です。札幌には約8万人の大学生・専門学校生が暮らしていますが、札幌市では大学との連携事業などを通して、若者ならではの感性をまちづくりにも活かしていきたいと考えています。雇用状況の低迷もあってか、昨今の学生はややおとなしい印象もありますが、柔軟な発想で新たなビジネスを開拓するパワーこそ若者の特権です。自己実現できる世界を自ら見いだし、札幌を舞台に活躍してほしいと願っています。

山下・山崎:本日はありがとうございました。

「市長と“おしゃべり”しませんか」 in 北星学園大学

2006年には上田市長が北星学園大学に来校し、本学の学生達と意見交換を行いました。

学生たちの素顔
Our students: A closer look

東アジア学生交流プログラム
［EASCOM］

アジアに広がる、北星の輪。

北星学園大学では、
アジアのさまざまな地域からの短期招聘生との
交流を目的とした「東アジア学生交流プログラム」
（East Asia Student Communication Program：EASCOM）
を毎年実施しています。
言語や文化は違っていても、学びの好奇心は同じ。
若き友情の輪が、北星からアジアへと広がっています。

見て学ぶ、食べて知る、アジアの素顔。

《2009 東アジア学生交流プログラム〈EASCOM〉イベントレポート》

北星学園大学では、国際交流協定を結ぶ海外の大学との交流活動の一環として、1995年から2週間の短期招聘プログラムを実施しており、2001年からは学生有志で「短期招聘プログラム実行委員会」を結成しました。2004年には「東アジア学生交流プログラム」（EASCOM）と改称。現在は大連外国語学院（中国）、カトリック大学校（韓国）、東海大学（台湾）からの短期招聘生を毎年受け入れています。

EASCOMでは、プログラム立案・計画から実施まですべて学生が担っています。さらに招聘生の滞在中は、キャンパス内・学生交流会館 kirari に実行委員も合宿。寝食をともにする日々の中で、国境を超えた友情が育まれていくのです。

2009年度のEASCOMは10月14日～28日までの2週間。地域交流夕食会や生キャラメル作り、北星サミット（討論会）など、学生たちがアイデアを凝らしたさまざまなプログラムが実施されました。「アジア舞台」では各国の招聘生が民族衣装をまとって伝統芸能や創作劇などを披露。日本にはあまりない鮮やかな色彩やエキゾチックな音色に学生たちも興味津々でした。また、毎年大人気の企画「アジア屋台」では、招聘生が自ら腕を振るって自国料理を販売。当日はあいにくの雨模様でしたが、招聘生と実行委員の元気な呼び声に誘われて学生や教職員が次々に訪れ、売り切れ続出の大盛況となりました。

［アジア舞台］伝統文化紹介

〈中国〉
●弾き語り
●中国の踊り
（田植え踊り、
チベット族の踊り）
●合唱

〈韓国〉
●サムルノリ（4つの打楽器を使った伝統芸能）

〈台湾〉
●創作劇（台湾の伝統的な結婚式を再現）

［アジア屋台］お国自慢メニュー

［中国］◆春餅（シュンピン）
小麦粉で作った薄い皮で具と甜麺醤を包んで食べる中国風クレープ。
◆八宝粥（バーバオチョウ）
雑穀や小豆など8種類の穀物を煮込んだぜんざい風の甘いおかゆ。

［韓国］◆トック・マンドゥグック
薄い餅（トック）の入ったスープ餃子。体が温まります。
◆コマ・キムパップ
ハムやたくわんが入った、一口サイズの韓国風海苔巻き。

［台湾］◆炸醤麺（ジャージャーメン）
茹でた麺の上にきゅうりやピリ辛の肉味噌をのせた汁なし麺。
◆タピオカミルクティー
大粒のタピオカ入りミルクティー。太いストローでいただきます。

若者の情熱と友情は、言葉も海も超える。

《EASCOM招聘生&実行委員長座談会》

EASCOMに参加した3名の短期招聘生と、彼らを迎えたEASCOM実行委員長が2週間をふりかえって語りあいました。

2009年度EASCOM実行委員長
経済学部
経済学科3年 **畑 裕美香**（はた ゆみか）さん

中国・大連外国語学院4年
陶 増傑（トウ ゾウケツ）さん
日本人はみんな親切で感激しました。ぜひまた日本に来たいですね。

韓国・カトリック大学校2年
鄭 玉鉉（ジョン オキョン）さん
家族同然に過ごした2週間。アジアの友情は帰国しても続きます。

台湾・東海大学4年
楊 宗樺（ヨウ ソウ カ）さん
日本語を学んで5年。初めての日本は驚きと感動の連続でした。

畑: みなさんは今回が初来日でしたが、どんな感想を持ちましたか?

楊: 暖かい台湾と違って北海道は寒かった（笑）。台湾では移動にバイクを使うことが多いのですが、日本の学生は自転車や徒歩が多くて意外でした。

鄭: 韓国人にとって日本は「近くて遠い国」。でも実際に来てみると日本人はみんなやさしいし、食べ物もおいしいし、自然も豊かだし、すっかり気に入りました。

陶: 中国も、歴史的背景から日本に負の感情を抱く人が少なくありません。でも日本語を学んで来日して、イメージが変わりました。日本人の細やかなおもいやりの心は、中国人とは異なる魅力だと思いました。

畑: 一番印象的だったプログラムは何でしたか?

鄭: 私は「北星サミット」。国が違ってもアジア人同士考えが似ているのが面白いと思いました。初めて見たYOSAKOIソーランでは、情熱的な踊りにびっくり！日本人はおとなしいイメージだったので意外でした。

楊: 合宿中、毎晩のようにみんなでゲームやおしゃべりをしたのが楽しかった。ホームステイ先で食べたイクラのおいしさも忘れられません。

陶: 私も合宿生活が一番の思い出です。最初は日本の若者とどう接したらよいのかわからず不安でしたが、北星の学生はみんなフレンドリーですぐに打ち解けることができました。家族のようなぬくもりのある2週間でした。

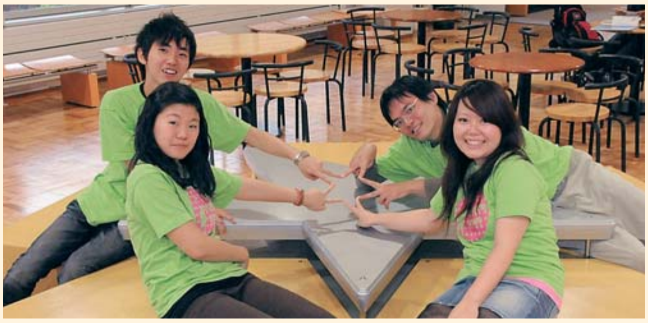
畑: そう言ってもらえてホッとしています（笑）。EASCOM委員もプログラムを楽しみながら、みんなと良い友好関係を築けたことを本当にうれしく思っています。最後に、今後の抱負を聞かせてください。

楊: 帰国後すぐに日台交換留学プログラムの面接試験が待っています。今回の体験を大いにアピールして、日本留学の夢を実現したいと思います。

鄭: 今回の経験を通じて、世界における自分の立場を「韓国」から「アジア」という大きな視点で捉えることができるようになりました。将来は通訳として、日本と韓国の架け橋となるのが夢です。

陶: 言葉は違っても若者同士は心が通じ合う喜びを知りました。日中間にはさまざまな課題があるけれど、私が経験した「ありのままの日本」を中国に伝えて、若者の視点からよりよい日中関係に貢献したいと思います。

畑: みなさん本当にお疲れさまでした。帰国してもメールで連絡をとりあいましょう!



OB & OG Interview

卒業生は、いま。

「音楽が大好き」という吉田さん。
30数年ぶりに大学チャペルの
パイプオルガンの前に座り、うれしそう。

自ら発信する。そこから未来が始まる。

1974年。「バリアフリー」という言葉がまだなかった時代に、先天性眼疾患による全盲の学生・吉田重子さんが北星学園大学に入学しました。現在は盲学校教諭として教壇に立つ傍ら、パソコンと音声化ソフトを駆使してエッセイなどの執筆活動にも取り組む吉田さんにお話を伺いました。

北海道高等盲学校教諭(社会科)

吉田　重子さん

1978年3月　北星学園大学文学部社会福祉学科卒業
1997年3月　北星学園大学大学院文学研究科
社会福祉学専攻修士課程修了

引っ込み思案を克服した学生時代。

私が北星学園大学に入学したのは30年以上も前のこと。当時はまだかなり珍しかった点字入試を経て、社会福祉学科に入学しました。高校まで盲学校で学んできた私にとって、大学は何もかもが未知の世界。それまでは視覚障害ゆえに引っ込み思案になりがちでしたが、そうも言っていられません。先生方に事情を理解していただくために、研究室を一つひとつ訪れては授業中に配慮してほしいことや定期試験の受け方などについて説明したり相談して回りました。この経験をきっかけに「社会では自分から発信しなければ何も始まらない」と実感したのです。これは視覚障害を持つ人だけでなく、社会で生きるすべての人に言えることだと思っています。

大学ではたくさんの友人にも恵まれ、楽しい4年間を送ることができました。友人6人で金沢旅行したりもしました。正直に言うと、これまで、キリスト教に対してある種の抵抗感を抱いていましたが、この大学生活を通して、かなり氷が解けたのです。礼拝堂でパイプオルガンを弾かせていただく機会を得たことは、その始めの一歩だったかもしれません。今では懐かしい思い出です。その一方で「学生時代にもっと学べることがあったのではないか」という反省も少なからずありました。卒業後は盲学校教諭として勤務する傍ら、1994年に大学院に入学。再び北星キャンパスで学び、職場での体験を通して障害者の就労に関する見解をまとめました。

視覚障害者が安心して暮らせる社会を願って。

北海道高等盲学校の生徒数は現在70人あまり。いわゆる普通科高校から職業自立を目指す専攻科まで、長い時間を限られた少人数の人間関係の中で過ごすため、社会に出ることに消極的な生徒も少なくありません。でも私は、チャンスがあるならぜひ大学で学んでほしいと思っています。新しい人間関係を築き、社会経験を積む日々は、視覚障害にとらわれない大きな視野と未来の可能性を広げてくれるもの。自らの経験を踏まえて、そう実感しています。

視覚障害者が社会に対して消極的になるのは、ほかにも理由があります。最近は音響式信号機や地下鉄ホームの転落防止可動柵などの整備が進み、視覚障害者もずいぶん外出しやすくなりましたが、まだまだ街には危険がいっぱい。たとえば環境にやさしいといわれるハイブリッドカーは、エンジン音が静か過ぎて視覚障害者が気づかない危険性が指摘されています。また、私は歩道を走る自転車と接触し、白杖(はくじょう)が折れてしまったこともあります。健常者にとって便利なものが、時には視覚障害者を社会から遠ざける原因となることも少なくないのです。しかし、このような理解を得るためにも、やはり自ら発信し、そしてまた、他の人たちの立場や事情を受け止めていく力も養いたい、と願っています。

エッセー集
『点字からはじまるメッセージ』を
昨年5月に自費出版。

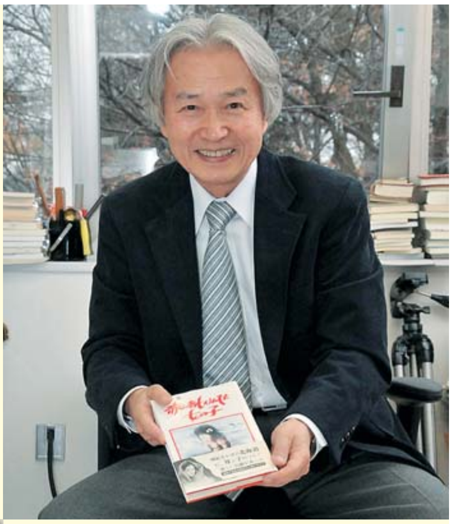
「体験の大切さ、
想像が創造につながる楽しさを、
生徒に伝えたいですね」と吉田先生。

Featured Faculty Member

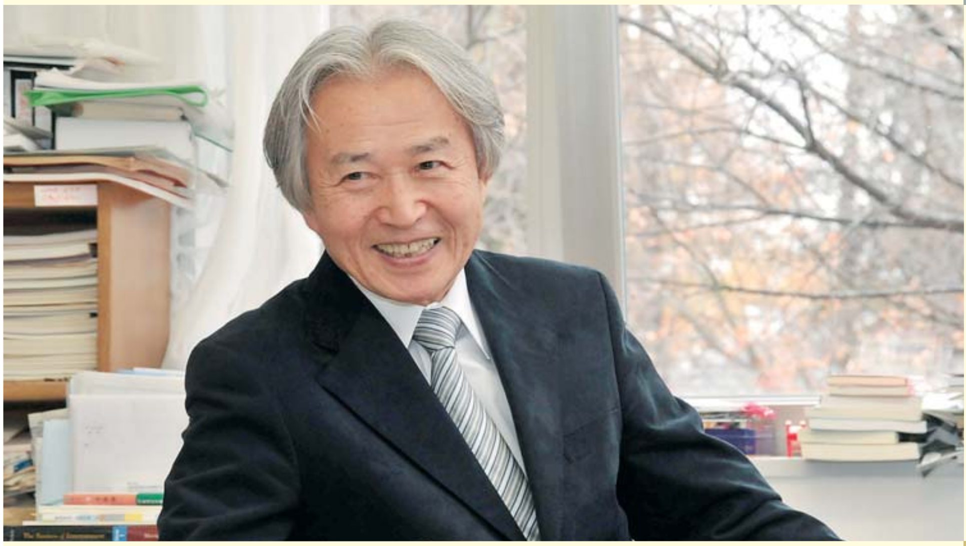
先生たちのその素顔

●文学部　菊地 寛先生●

人間ドラマを追いかけて、時代の風を切って、前へ。



1979年に上梓した『赤い靴はいてた女の子』は、ジャーナリスト菊地寛の代表作のひとつ。



PROFILE

菊地　寛（きくち　ひろし）

1940年　北海道旭川市生まれ。

1964年　北海道大学法学部卒業。同年北海道新聞社入社。編集局社会部記者などを経て、北海道テレビ放送（HTB）へ。ニュース、番組制作などを幅広く担当。プロデューサー、常務取締役などの傍ら、北星学園大学非常勤講師も務める。

2002年　北星学園大学文学部心理・応用コミュニケーション学科教授に着任。マスコミュニケーションの心理学、ルポルタージュ論、専門演習などを担当。

現在、日本放送作家協会北海道支部事務局長も務める。

炭鉱からオリンピックへ。人間ドラマの光と影。

私の社会人としての第一歩は1964年。かけ出しの新聞記者として赴いた夕張では炭鉱閉鎖が相次ぎ、炭鉱事故も度々発生して、否応なく生と死、人生の重さと直面しました。その後、札幌の社会部に転任。1972年の札幌オリンピックでは、自らもカメラを携えて取材に奔走しました。中でもスキージャンプの笠谷幸生選手は忘れられません。70m級で金メダルを獲得し、2個目の金をかけて挑んだ90m級のラスト1本。スポーツ報道記者は笠谷選手に焦点をあてますが、社会部記者の私はあえて本人ではなく飛距離判定員に向けてシャッターを切るようカメラマンに指示しました。これで優勝しても万一ダメでも、その判定員はスポーツの歴史に残る一瞬の証人となる――それは、報道記者としてオリンピックを取り巻く人間ドラマを追い続けていた私なりの、とっさの決断でした。結局、笠谷選手は失速してメダルを逃してしまったのですが、その時の取材写真が大きく掲載された翌日の紙面は、オリンピックを陰で支える人々のドラマに光をあてた記事だったと今でも強く印象に残っています。

もう一本 折りむなし

肩落とす106の男

落ちた…笠谷が…

いい調子だったのに

北海道新聞 1972年2月12日掲載
笠谷選手無念のジャンプを伝えた当時の新聞記事。飛距離判定員をクローズアップした世紀の一瞬の写真には若き日の菊地先生の姿も!

歴史のうねりの中で、テレビとともに。

時代を生きる人々のドラマ。それは新聞記者時代も、その後テレビプロデューサー（北海道テレビ：HTB）になってからも変わらない私のテーマです。当時のHTBは開局して5年目で、現在のように自主制作番組を作れる予算も制作力もあまりありませんでした。そうした中で、報道番組やドキュメンタリーの地方枠をできるだけ多く確保し、自分たちの制作実績を蓄積していきました。その経験がスタッフを育て、制作力のストックとなっていったのです。これもテレビ新時代のドラマのひとつかもしれません。東西冷戦からソ連（現ロシア）崩壊へと歴史が動いた1980～90年代には、マスコミの立場から北海道とロシアの架け橋になりたいと考え、ヨット航海による北海道とシベリアや極東地域の民間交流を実現。日本海やロシアの大地でも数えきれない出会いとドラマがありました。

コミュニケーションから自分自身が見えてくる。

北星学園大学に着任して今年で9年目。マスコミュニケーションの心理やルポルタージュ論などを主な研究分野としています。授業やゼミでは学内インタビューをもとにした映像制作、ルポルタージュや小説、コラムなどの創作なども実践。これらの活動の軌跡をゼミ冊子『com』にまとめて発信しています。ジャーナリズムの基本は、まず自分で現場体験すること。さまざまな人とのコミュニケーションを通じて社会の“いま”が浮かび上がり、自分自身の“いま”が見えてくる。それを形にして人に伝えようと奮闘するプロセスこそが、人生の大きな糧となります。ヨットはさまざまな角度に帆を操ることで、向かい風でも前に進むことができる。人生も同じです。厳しい時代背景、自分自身との戦い・・・・・・どんな向かい風にも屈することなく進んでほしい。学生諸君の前途に大いに期待しています。

手にしているのはゼミ冊子『com』2009年度版のゲラ。多彩なゼミ生の作品には学びと青春の軌跡が詰まっています。

本屋のオヤジと本好き学生、大いに語る。

個性派書店「くすみ書房」が大谷地へ。

「売れない文庫フェア」「中学生はこれを読め!」などのユニークな企画で知られる「くすみ書房」。戦後まもなくから60年以上、西区琴似で営業してきましたが、昨年9月に厚別区大谷地の商業施設「キャポ大谷地」に移転しました。もともと大型書店が少なかった大谷地界隈の住民や北星学園大学の学生にとって、くすみ書房オープンはうれしいニュース。本学の読書好きを代表して図書館学生ボランティア「HONTAN(ホンタン)」メンバーが、“本屋のオヤジ”こと「くすみ書房」社長・久住邦晴さんにお話を伺いました。

くすみ書房社長 久住 邦晴さん

文学部
英文学科
3年 山根 舞さん

文学部
心理・応用コミュニケーション学科
1年 水谷 しおりさん

山根：大谷地に移転オープンして数ヵ月。琴似との違いはありますか？

久住：大谷地は地下鉄駅やバスターミナルが近いのでお客様が大幅に増えました。大谷地〜厚別は近年開発が進んだ地域なので発展的な雰囲気もあり、新規顧客が増えていく可能性を感じます。

水谷：移転したことで購買状況に変化はありましたか？

久住：「売れない文庫フェア」や「中学生はこれを読め!」といったくすみ書房の看板企画は引き続き行っていて、おかげさまで人気も上々です。その一方、琴似時代には売れなかった歴史書や専門書がよく売れるのが予想外でしたね。とはいえ、売れ筋やベストセラーよりも私の好みを優先するのがくすみ書房(笑)。そのこだわりは大谷地でも変わりません。

山根：くすみ書房といえば、個性的な品揃えに加えてユニークなイベントも人気です。新たな企画はありますか？

久住：くすみ書房のモットーは「おもしろくて・すごくて・へんなこと」。大型書店ではやらないことにどんどん挑戦していきたいと思っています。まずは大谷地移転第一弾企画として、昨年10月から毎月第4土曜日、地域のお母さんのボランティアによる読み聞かせ会を始めました。家庭内で最も発言力があるのはお母さんですから、これを機に家族を本屋に連れてきてほしいなと(笑)。今後は琴似時代から好評だった朗読会やトークショーもやりたいですね。また、琴似のブックカフェ「ソクラテスのカフェ」で開催してきた企画「大学カフェ」でも昨年12月に北星学園大学社会福祉学部の木下武徳先生をお招きするなど、大谷地移転を機とした新たな試みが始まっています。

水谷：「大学生はこれを読め!」はいかがでしょう……？

久住：できれば大学生は本屋のオヤジに言われてではなく、自分の意志で本を選んでほしいな。学生時代の本との出会いは、素晴らしい財産ですから。もちろん本屋としても大学生のニーズを取り入れて、自分で本を選ぶための情報発信をしていきたいと思っています。

山根：私たち図書館ボランティアも、本学学生の読書意欲を喚起する学内企画を盛り上げていきたいと思っています。その意味でも大学の近くに「くすみ書房」があるのは心強い限りです。

久住：ご近所のよしみで、これから一緒に考えていきましょう!

くすみ書房　札幌市厚別区大谷地東3-3-20 CAPO大谷地　TEL／011-890-0008　営業時間／10:00〜21:00 年中無休

HOKUSEI INFORMATION 北星学園大学からのお知らせ

TOPICS

春よこい! 早くこい!

クロッカス球根植栽

中庭にクロッカスの球根1,000個を植栽。

北星学園大学を花いっぱいのキャンパスにしよう——昨年10月、金井学長が呼びかけ、スミス・ミッションセンター学生会の主催で、クロッカスの球根1,000個が中庭に植えられました。いまは雪の下で眠っている球根たちがカラフルな花を咲かせるのは、4〜5月頃の予定。待ちどおしい春はまだ先ですが、北星キャンパスでのお花見をお楽しみに!

Hokusei Gakuen University
北星学園大学
北星学園大学短期大学部

発行／広報委員会
〒004-8631 札幌市厚別区大谷地西2丁目3番1号
TEL 011-891-2731(代表)
URL http://www.hokusei.ac.jp
E-mail kikaku@hokusei.ac.jp

【広報誌「HOKUSEI@COM」】
タイトルの「COM」は「COMMUNITY(地域社会)」「COMMUNICATION(コミュニケーション)」の頭3文字を取ったもので、本誌が北星学園大学と地域のみなさまを結ぶ架け橋となるように、との願いをこめたネーミングです。

PRINTED WITH SOY INK